

の故老の云ふも昔國の王は女の他へ嫁らざる密使あり  
ありあらばその密使の刑せられしをさげすむ王のむきおれを  
殺さふ思ひごとく<sup>ウツロ</sup>倉舟にすませり流しつ生頭を天子任せ  
まつてもまの箱の中ぢうも密使の首をわめいぶんとむしり  
かゝる妻女のくつろ船をこせされし頃が直に流しは深見せ  
しとありけりよの松中やと板板のとなりたて載りて人の  
首此方ありしがあつたけりし。碑は傍を合へられた  
件のかねの中<sup>ウツロ</sup>は氣のたれるごとくはれたが妻女がしをこま  
めをこめせぬるめりといひしごとくこのも 官序人よま  
あべきりくとも 雜費も大く暇あふかりのたつ突流し

先例もあれども又もいひしごとく 船に乗せり沖へ引出  
け推流しとて思ひし仁人の心をせりかまめありあらばとて  
その妻女の不幸おれり又も舟中△王○△  
此妻女のヨメくありしとありし後よおめありたる浦  
かゝる沖に歌りしるイギリス船もこれらに昔やありのり  
件の妻女にイギリス船にへんがらかりたりかゝるの妻王  
の女<sup>ウツロ</sup>たりしこれも亦知れりしとて昔時ありしものあり  
とありし右のわし國使共の疎齋ありし具於<sup>ツツ</sup>のを憾<sup>ウツロ</sup>  
とてなる中れありしがいひしごとく

三十一

めい

文字

松の

申子

一云五月二月中かのこののあ仲子

おんかひお又志をくく又ふり

おんけお 小笠原藤中

はあ仍不た陸屋か一ま於

茶会々候一月八月の遠

まあつけ申子

の十九大女

身のとけ六天

かはの志まき白く

まもを髪赤黒く

ふうどくふるうつ

くーくさま

かんで女んおんせい

又あふ木の武人むろの

ゆねたふさをかいた切

なるあにやあふ

人をとをつけぬあ

一敷地一敷地てやう

一食物園をて神う

一茶の人のやう

あやうゆう

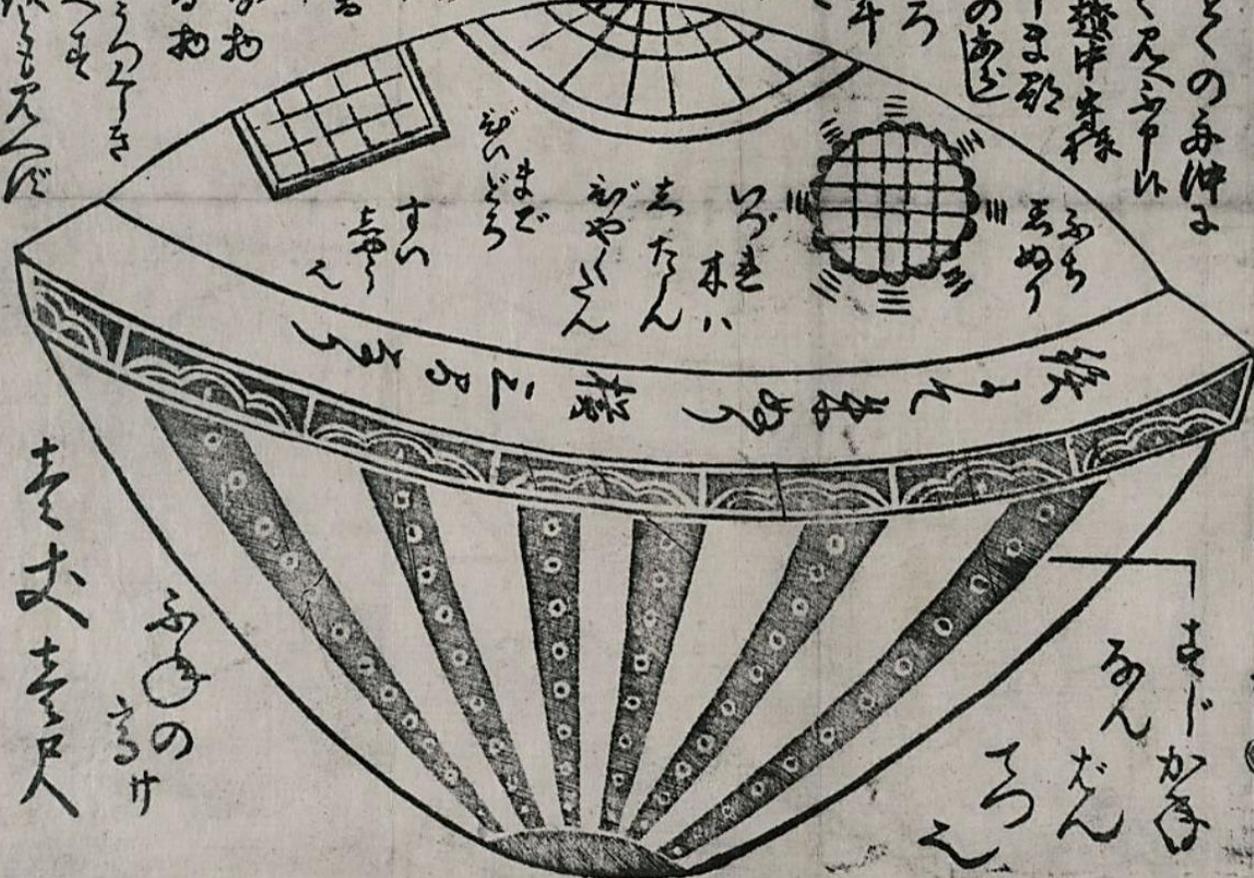
一火体らしを

神あふの神うあの色り



あふの

あふの



まどか  
あん  
たん  
あ

あふの  
あふの  
あふの



## 空船の事

享和三癸亥年三月二十四日、常陸の國原舎濱と云處へ、異船漂着せり。其船の形ち、空にして、釜の如く、又半に釜の刃の如きもの有。是よりうへは黒塗にして、四方に窓あり。障子はことごとく、チャンにてかたむ。下の方に筋鐵をうち、何も南蠻鐵最上なるもの也。總船の高さ一丈貳尺、横径一丈八尺なり。此中に婦人壹人ありけるが、凡年齢二十歳許に見えて、身の丈五尺、色白き事雪の如く、黒髪あざやかに長く後にたれ、其美顔なる事云計りなし。身に着たるは異やうなる織物にて、名は知れず。言語は一向に通ぜず。また小さ成箱を持て、如何なるものか、人を寄せ付すとぞ。船中鋪物と見ゆるもの二枚あり。和らかにして、何と云もの乎しれず。食物は、菓子と思鋪もの、井に練りたるもの、其外肉類あり。また茶碗一つ、模様は見事成る物なれども分りらず。原舎の濱は、小笠原和泉公の領地なり。

